

“ 五井宿 ” をあらく！

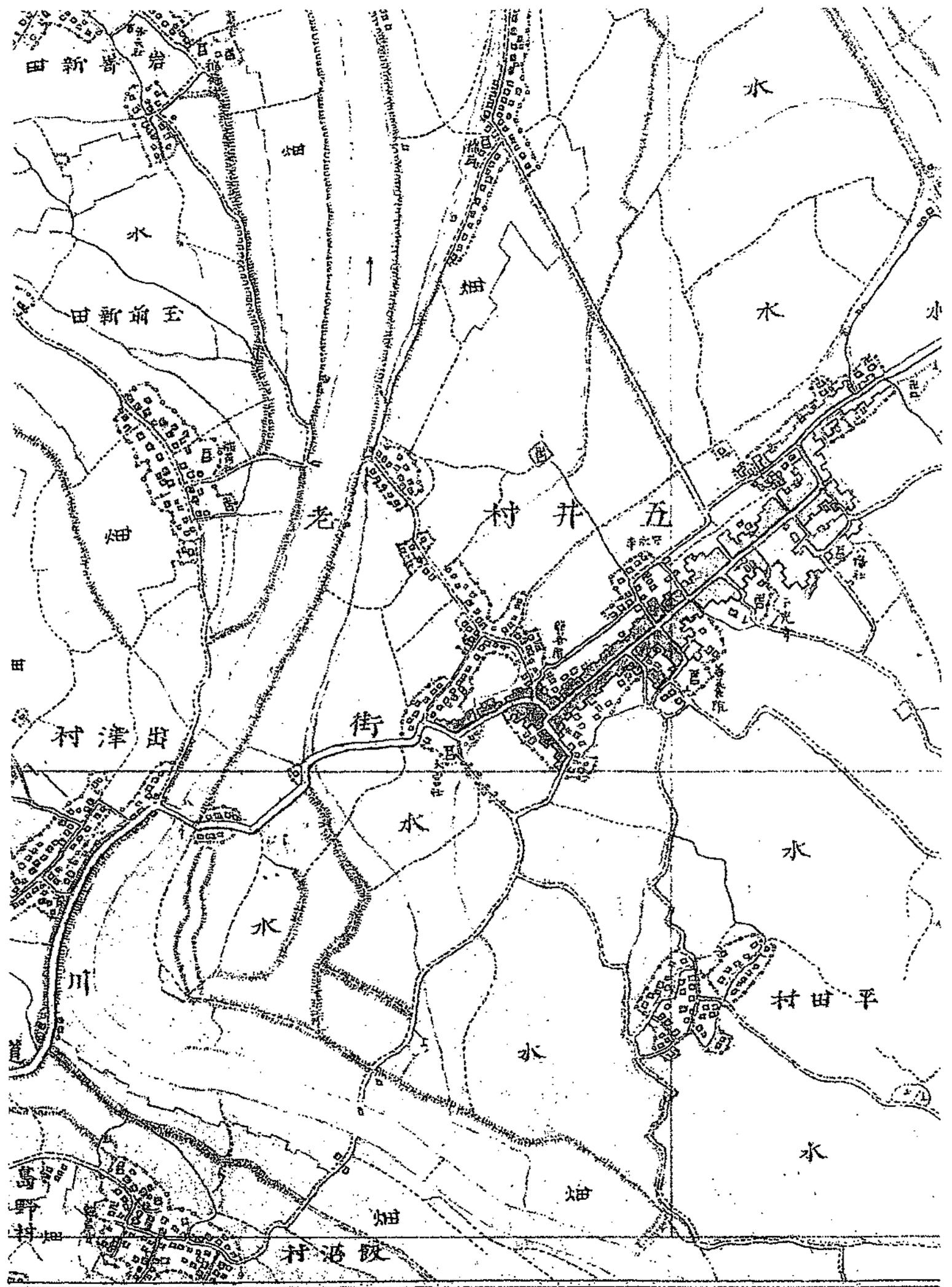
日時 2023年11月19日（集合 9:30 梨ノ木公園:五井駅前）

コース: 梨の木公園 五井小創立100年記念碑 五井陣屋跡 →
千光寺(北五井学校碑) → 若宮八幡神社 → 街かどの石
仏 → 五井宿の町並み → 守永寺 → 龍善院 → 庚申塔・
道標 → 大宮神社 → 宿大神社

歴史めぐりのポイント

- 1 明治の学校制度を考える
- 2 五井宿の様子: 享保6年(1721)の村明細帳の記載のイメージが街並みに残っていないか。なぜ、残っていないのか？
- 3 寺院に残る供養塔などから、五井村の様子をイメージすることができるのか
- 4 五井宿の繁栄は養老川舟運によってもたらされたのではないか。
五井河岸と五井宿の関係は？ 五井河岸はどんな様子だったのか？
- 5 養老川舟運の中心荷物である“薪”の商品としての価値の大きさは？
- 6 地図から何が読み取れるか、すでに失われている五井村をイメージしてみる

* 文献調査を中心にしおりを作成しました。お寺に歴史めぐりで境内に入る了解をえるため訪ねて、若干聞き取りを行い資料の提供をいただきました。江戸時代の村を調査する上で基本となる村役人の家を確認しようとしたのですが、ほとんど確認できませんでした。簡単な聞き取りでしたので不十分です。江戸時代の五井村をイメージするためには、今後、市史編纂段階での調査の確認あるいは現在わかっている資料の再学習が必要になるものと思われます。わかっていないことがとても多い地域だと思います。





五井小創立100年記念碑 五井陣屋跡

昭和戦前・戦中の教育

王政復古により成立した明治政府は、明治4年(1871)に廃藩置県を断行し、直後の明治5年8月にフランスの制度を基に「学校令」が布告され、全国に学校が創設された。市原市においても明治6年に姉崎・馬立・鶴舞東など32校、明治7年に南五井・北五井・菊間などに19校、明治8年に小草畑・金剛地などに9校、明治9年に平蔵・磯ヶ谷など9校の学校が寺を利用して開設されている。

新しい学校制度は、急に発令されたこともあり、地方の実情を無視している面があって、一部で暴動が起きるなど民衆の反発を招き。西南戦争を経た明治12年9月に「教育令」が公布された。その後、学校制度は、明治13年12月「改正教育令」、明治19年「師範学校令・小学校令・中学校例」の公布と続いて発布された明治22年2月大日本帝国憲法が公布され、翌年、道徳教育を強調する「教育勅語」が発布される。千葉県は明治25年3月三大節祝賀式で奉読を義務付け、その保管場所についても、「御真影」と共に「奉安殿」を校庭の一隅に建てるよう指導した。明治33年尋常小学校を4年に統一。4年の義務制が実現。明治38年に就学率は95%を超える。

大正デモクラシーの時期を経て昭和を迎える。

昭和6年(1906)9月柳条湖事件を契機に満州に侵攻(満州事変)が始まり、昭和11年、2・26事件(クーデター未遂事件)が起きる。

昭和16年3月、国民学校令が出され、全国の小学校は、国民学校と改称される

昭和16年12月の太平洋戦争以後は非常時教育の施策を実施する機運が高められ、18年からは決戦体制となり学徒出陣が始まる。また学童の集団疎開が始まり、昭和19年8月、市原郡は本所区(現墨田区)の四校(柳島・業平・吾嬬・牛島)の児童約1205名を12町村26寺院で受け入れている。

- ・明治7年(1874)3月五井村に南北五井小学校の2校を開設す。同16年初等中等科の小学校に改め、同17年5月南北の両校を併合し五井小学校と称す。同19年現在の位置に校舎を新築し之に移り、同20年五井尋常小学校と改称する。同25年11月15日高等科を併設して、校名を五井尋常高等小学校に改め、明治27年及び35年の2回に校舎を増築し、更に明治44年校舎を2棟を増築し今日に至る。(郡誌)

千光寺(北五井学校碑) →

五井町本仲にあり真言宗にして市原村能満釋藏院末なり、元自心坊にありし坊なり、昌藏院摩滅の後同寺の法器を不殘神尾家より下さる、依て一寺に取立千光寺と号す、本尊大日如来は昌藏院の本尊たりしなり、昌藏院は千光寺地内焰魔堂の辺にありしなり、地藏寺は善養院より宿氏神の連地に在り、伝云天長年

中慈覚大師関東を遊化し給ふ時、錫を此に掛け地藏尊を刻み当寺を草創し給ふと云う、地藏院・昌藏院共に故ありて元禄己巳二年缺所摩滅せり、依て地藏院境内の半分を神尾家より守永寺に本尊並に法具田畑は善養院に檀家は龍善院に下さる、昌藏院の分は悉く皆千光寺に下さると法会宝物記すべきものなし。

若宮八幡神社 →

パンフに記載あり、市史には特に記載なし

街かどの石仏 →

・神社仏閣に奉納されている供養塔など石仏は信仰の現われのひとつであり敬うべきものです。同時に、造られた当時の様子つたえている点で、貴重な資料でもあります。供養塔の形態などを細かく調査し、掘られている仏の姿や石材の材質、文字などから解析を行います。歴史の分析としては、掘られている年号などから推定を行います。一般的に、供養塔など石仏をつくるためには一定の財力が必要となり、江戸時代の寛文・延宝期に庶民の経済力が向上するなかで広く普及していったと思われれます。

五井宿の町並み →

五井陣屋跡：五井藩主有馬氏の陣屋跡。天明元年（1781）有馬氏恕は五井村に居所を設け（寛政重修諸家譜）柳前1町四方の敷地を土手掘が囲み、居館のほか地方役所・武家屋敷・稻荷神社があったとされる。

・武家屋敷が設けられたとはいえ、定府大名のため通常藩士は陣屋預・地方役人などがあるくらいで、常駐の代官は五井村の新藤・中嶋両家を大名主として領内を管轄させた。（「郷土歴史大辞典12 千葉県地名」平凡社）

五井村 (天領 六尺給米他有) 享保6年2月

- ・承応元年(1654) 神尾宮内検地
- ・五井村高 2048石2425
 - 南五井 959石4307
 - 北五井 905石4786
- ・惣家数 507軒 内64軒水呑
- ・人数 2867人 男1555人
女1312人
- ・馬 211疋
- ・塩三百六拾壹石壹升四合 定納 塩年貢
- ・永九貫弍百五拾文 定納 船役永
- ・永拾五貫文 不同 浦運上
- ・惣家数五百七軒 内六拾四軒水呑
惣人数弍弍(ママ)千八百六拾七人
- ・農業の間かせきに男女ともニ塩を焼、野方へ出て塩売、またハ蛤・蜷を取、
野方へ出て是を売
- ・大川 砂川也 歩渡 幅 四拾間余
是ハ房州境清住山峨より流来り、当村之辰巳ニ有川也、此川魚獵なし、但当村田
方拾三、四町之用水ニ成、川上廿五里村・村田村両村地内用水溝六百四拾間余、
当村ニ千八百七拾間余有之、尤何も溝代高之内ニて引被下候
- ・海小漁獵有
是ハ年々摂州福島之者共当浦ニ罷越請負仕、地引網仕候、尤浦運上之儀ハ御割付
戴年々上納仕候、所ニてハ獵不仕候、所之者塩場有之塩焼申候
- ・大船荷舟 無御座候
- ・小船荷舟 弍拾壹艘 内 五艘ハ三人乗
拾六艘弍人乗
- ・当村浦方ニて御座候え共、所ニて漁獵も不仕、販ひの所ニて無御座候
- ・米津出当浦より直ニ船積、居村より浦迄道法拾町程、江戸まで海路拾里、運賃三分、
内壹分壹厘御公儀様より被下候、残り壹分九厘百姓出し申候
- ・御拳場・御鷹場・捉場ニて御座候、明場ニて御座候
- ・枝郷 出洲
百姓之外渡世者
- ・出家 拾弍人
- ・道心 七人
- ・山伏 三人

- ・医師 四人
- ・座頭 貳人
- ・大工 貳人
- ・木挽 貳人
- ・鍛鉛（冶） 五人
- ・造り酒屋 但、酒名代高貳拾石 喜兵衛
- ・同 但、酒名代高拾石 庄右衛門
- ・同 但、酒名代高拾石 太兵衛
- ・同 但、酒名代高廿石 七平
- ・同 但、酒名代高拾六石 作兵衛
- ・同 但、酒名代高拾二石 惣左衛門

「五井のむかしむかし」高澤恒子著（「上総市原 15号」平成29年3月）

江戸時代の五井村

- ・江戸時代、五井村に二人の大名主がいた。北五井村の名主・中嶋甚五左衛門と南五井村の新藤治左衛門である。

- ・①北五井村の名主、中嶋甚五左衛門について

通称屋号は「じんない」で居宅は旧五井小学校跡地（現在、梨の木公園）にあったという。「千葉県史料 近世編上総国 下」石井賢三家文書に寛政3年（1791）五井浦の舟持の中に甚五左衛門の名があり、五大力船の船持だったことがわかる。

- ・「五井町歴史年表」「義軍官軍むかしむかし」より甚五左衛門に関する記述を抜書
宝暦6年（1756）北五井村の若宮八幡神社に大水鉢を寄進、今も境内にあり使われている。中嶋図書、甚五左衛門の名が見える。

宝暦6年 北五井村波瀾に稻荷神社を再再建、

文成4年（1812）五井若宮前通りの岩野見村入口三叉路に南無阿弥陀仏の念仏塔を道標を兼ねて建立・願主中嶋隠居（甚五左衛門家）探したが見当たらず。

慶応4年（1868）甚五左衛門家は徳川方の義軍を迎え陣屋となり、主将や首領株がここに止宿したという。

明治27年（1894）5月頃、俗に竹の子渡しという南の強風の折、自ら火を出し、さしもの大邸宅も忽ち烏有に帰したと語り伝えられている。

- ・②南五井の名主 新藤治左衛門について

居宅は房総往還をはさみ甚五左衛門宅の反対側（西側）にあったと思われるがはっきりしない。若宮神社の境内にある羽黒神社は新藤家の屋敷神だという。

旧地は旧イトーヨーカ堂の東、安藤家と森田家との間にの奥まった所で、小さな祠がひっそりと建っていた。平成19年に若宮神社に移された。

地元では「おはぐろさま」とよばれ、船の神様として信仰されていた。「羽黒丸」という船が沈んだので祀ったという由緒がある。昔は境内で相撲が行われたそうだ。祠の石碑には「羽黒神社」と刻まれ、裏に明治31年4月とある。

・「五井町歴史年俵」より抜書

元禄4年(1691)五井村の大宮神社に、地頭神尾五良太夫・同や彌左衛門

殿・代官膏田角右衛門・名主新藤治左衛門の由緒書きの棟札ができる

宝永7年(1710)五井村の大宮神社を修復する。棟札記載あり(大宮旧誌)

享保17年(1732)大宮神社再建の棟札がある。(大宮旧誌)

寛政5年(1793)五井村大宮神社の社殿が再建造された(市原郡誌)

寛政9年(1797)松平定信は海防のため房総巡視の折、五井村新藤郡右衛門家(ママ)に宿泊

・明治11年(1878)11月五大区の取扱を分離して戸長役場を守永寺に設く、明治17年4月連合戸長置き、五井村外平田・出津・岩崎・玉前の4か村となれり、当時役場は小宮常吉の長屋を使用す。明治20年4月官選戸長となり、明治22年4月町村制施行のとき村上・君塚を合せ同時に戸長を廃して村長と改む。同24年五井村を五井町と改称す。同26年4月五井町役場をを新築して現在の地に移る。(郡誌)

守永寺 →

松平家信の墓(p616)

五井町上宿守永寺境内に在り、天正十八年庚寅松平家信此地を領し、寺は即ち菩提寺たり、碑二基を存す。一は法号恩院殿心誉理安大姉と称す、即ち家信実母の墓となす。一は法号照岳院殿前紀州清誉月桂浄靈大居士と称し則家信の墓とす

守永寺

五井町上宿に有りて浄土宗大本山知恩院の直末なり、伝云養老年中行基の開山して、光明寺と称す、天正十八年庚寅松平家忠の子家信此地五千石を領し、慶長十三年戊申家忠の母卒す、其法号(長恩院殿心誉理安大姉)を以て理安寺

龍善院 → 郡誌

龍善院八大寺鐘銘

五井町下宿に在り。(銘省略)

* 郡誌はなぜ龍善院の詳細を記載しないのか？

境内の供養塔

・境内の供養塔の年号から当時の様子を想像します。

元禄4年 聖観音 〇

正面 法流開山 宝暦4・正月・29日

傳授 大阿闍梨訪印 快正

中興開山 享保21年3月16日

傳授 大阿闍梨訪印 快長

側面右 元禄2

権大僧都訪印 貞叢 不生位

7月5日

側面左 貞享5年

権大僧都訪印 宥舜 不生位

7月5日

裏面 宝永3

権大僧都訪印 朝盛 不生位

3月28日

大宮山八大寺善龍院歴代住職墓碑

法流開山 宝暦4年正月29日滅 伝授大阿闍梨訪印 快正

②明和5・9・27 宥盛 ③天明1・4・27 栄宥 ④寛政2・11・26

栄任 ⑤文成2・1・3 栄雅 ⑥文成8・7・28 明道(殿堂再建)

⑦文成9・3・23 尊栄 ⑧天保11 是住 ⑨天保15・2・20 海惠(青梅養福寺転住)

文久2・8・12 盛海 ⑩文久3・11・27 興舜(千当院転住) ⑪明治5・5・18 (以下略)

庚申塔・道標 →

・パンフに記載あり。

房総往還：「下総・上総・安房三国の江戸湾側を南北に結ぶ道の総称。公的な路程ではなく、固定した呼称もないが、便宜上船橋宿から館山城下までを区間とし、史料上は房総往還・房州往来・房州道・木更津道・上総道などとみえ、近代には千葉街道・房総街道の称がもちいられた。」（「千葉県地名」平凡社）

大宮神社 → 市原郡誌（p 6 1 9）

大宮神社

五井町宮ノ下にありて国常立命・天照皇太神・大山祇命・埴山姫命を祭る。当社は景行天皇の御宇日本武の尊東征の時之を祀り、東夷の静平を祈る。降て治承中源頼朝安房より上総を経て登場するや幣帛を奉り以て祈る所あり。建久中家臣に命じて報賽せしむ、爾後屢々家臣を代参せしと云う。天文中北条氏の里見氏と兵を構ふる時、祠前に参籠して戦勝を祈り太刀一振を献ず、徳川氏の世に及び地頭松平家信神尾守勝・領主有馬宇治氏倫等深く之を崇敬し、毎年幣帛を奉じ祭具を献じて采邑の鎮護武運の長久を祈られたりといふ。偶々火災に罹り古記什宝悉く烏有に歸す。寛政の頃は地頭領主に於て修築す、享保年度迄は近郷四隣の総鎮守たりきと。現字は即ち寛政五年の再建にして元蔵する所の棟札に徴すれば、永正七年家老赤思新門・藤井源兵衛の修造せしものにして、享保年中再度の修理を加へたるものの如し。宝物としては神鏡四面（品質青銅円形径五寸作者伝来未詳但し天平元己巳年九月鑄し奉りたるものと申伝ふ）、神像一体（品質青銅径四寸五分以上の神像鑄形あり作者伝来未詳但し日本武尊にして、天平元己巳年九月鑄造し奉りたるものなりと申伝ふ）、太刀一口（長二尺五寸作者不明天文中北条氏直奉納）

戦後の大きな出来事のひとつに「農地解放」がありました。その記録が境内にあります。自作農創設特別措置法

具体的には、

【農地解放記念之碑】

解放農地	田畑	3 2 5 町 7 反 6 畝	4 1 4 戸
	宅地	2 万 8 1 4 坪	1 2 1 戸
	家屋	5 棟	3 戸
売渡農地	田畑	3 2 6 町 6 反 1 畝	1 1 5 9 戸
	宅地	2 万 8 1 4 坪	1 6 6 戸
	家屋	5 棟	3 戸

羽瀨・12軒 十四棟・7軒 本仲・7軒 上宿・12軒 下宿・12軒
新田・12軒 川岸・5軒 岩崎・11軒 玉前・9軒 出津・11軒
平田・3軒 村上・18軒 藤目・3軒 岩見・4軒 君塚・19軒 ……
(以下 社寺・不在地主などあり)

昭和26年7月建之



GI-01 小湊鉄道機関車

小湊鉄道は当初、五井から外房小湊の誕生寺まで参詣者を運ぶために開業しました。3両のうち2両はアメリカのボールドウィン社から輸入された6輪連結10輪タンク機関車で、大正14年の開業から昭和38年まで使われました。もう1両はイギリスのペイヤー・ピーコック社から日本鉄道が輸入した4輪連結10輪タンク機関車で、昭和21年から同25年まで小湊鉄道で使われました。



GI-04 龍善院

真言宗豊山派の寺院で、大宮山八大寺龍善院といえます。開基は不詳ですが大宮神社の別当寺を務めた古刹です。大宮神社の記録には、村内地蔵院消滅の際に神社境内に住んだ修験者の龍善院を取り立て、修験堂を寺院にしたといえます。境内等には元禄年間の一石六地藏や五井町諸匠供養塔、市原郡八十八ヶ所札所八十四番の石碑、五井町馬車組合の馬頭観世音菩薩の碑があります。



GI-02 大宮神社

社伝によると日本武尊の東征の時に創祀され、源頼朝が安房から上総を東上の際、奉幣・祈願を行ったとされます。天文年間(1532~1555)には北条氏が戦勝を祈り太刀を奉納したと伝わります。江戸時代以降は旗本松平氏・神尾氏、領主有馬氏の崇敬を受け、開運や農漁業の守護神として広く民衆の信仰も集めています。秋季例祭では、上宿・下宿・新田の3地区の山車や神輿渡御で賑わいます。



GI-05 若宮八幡神社

貞観年間に大佐佐氣命を祀って創立し、源頼朝が鎌倉への途次、千葉常胤の一族が迎えて戦勝祈願をしたと伝えられます。八幡様の名で親しまれ、現在の本殿は大正期に、拝殿は昭和63年に改築されました。社殿の彫刻は弘化4年(1847)に伊勢参りの同行30人が奉納したもので、亀戸の彫工長坂政右工門恒教の名が刻まれています。境内には浅間大神の碑が建つ富士塚があります。



GI-03 庚申塔・道標

五井新田・下宿2号公園にある文化4年(1807)の庚申塔、かつては北東方面に50m程の交差点にありました。この地点は、木更津方面に続く房総往還と、君津の久留里城下に向かう久留里街道との分岐点に位置し、久留里街道起点の道標として重要な意味がありました。下宿の庚申塔として正面に青面金剛を浮き彫りにし、下に「江戸道」、左側面に「具流里(くるり)ミチ」と刻まれています。



GI-06 富貴稲荷神社

享保13年(1728)に領主有馬氏の代官が江戸から勧請したと伝えられます。この地は江戸と養老川をつなぐ水運の拠点として栄え、富をもたらす稲荷様は、地元民ならず関西漁民等の移住者からも信仰されました。社殿の見事な彫刻は文政期の社殿再建時のものと考えられます。境内には、宝暦4年(1754)の手水石や富士講の一派山包講により造立された文化7年(1810)銘の常夜灯等があります。